

美術界の社会学的分析

——2018年東京ウェブ調査の多重対応分析——

慶應義塾大学 磯直樹

【1. 目的】

本報告では、ブルデューの界理論を量的方法に応用することで、現代日本における美術界を社会学的に捉えることを目的とする。日本でこれまで行われてきた質問紙調査では、美術界の内部の差異を関係的に捉えたり、階級・社会階層と関連づけたりして分析するための質問項目が十分ではなかった。本報告は、このような課題に理論的かつ経験的に取り組んだ成果の一部として、多重対応分析によって美術界を描く試みである。

【2. 方法】

報告者は、2018年8月に東京都在住者を対象として「文化活動と社会意識」に関するウェブ調査を実施し、調査会社のモニター3090名から回答を得た。本報告ではこの調査から得られたデータを用い、特に美術に焦点を当てた分析を行う。美術に関するデータとしては、芸術家に関する好みと知識、美術館などに行く頻度、テレビの美術番組の視聴などの質問項目が同ウェブ調査に含まれる。また、SSM調査との対照を可能にするため、社会階層に関わる質問項目も含まれている。本報告で採られる計量分析の方法は多重対応分析であり、この方法を用いてブルデューの界理論を応用して美術界の社会学的分析を行う。

【3. 結果】

多重対応分析の結果、回答者の美術に関する知識と関与の違いから、美術界の特性と境界を捉える軸を2つ確認することができた。3つ目の軸として、知識や関与ではなく好みによって差異の表れる軸を確認できた。作家の好み美術史や美術批評でよく取り上げられる作家と一般に知られた作家は必ずしも一致しないが、前者に関心があるかどうか美術界の境界に関わる要因として考えられる。また、美術に対する関心や関与は、ある程度までは階級・社会階層を構成する要素となると考えられる。ただし、本ウェブ調査ではブルーカラー職に関する情報が十分に得られず、職業分類が不正確になっているという問題がある。美術界はまた、階級・社会階層に還元できない固有の特性に支えられていると考えられる。

【4. 結論】

ウェブ調査のデータを用いた多重対応分析により、美術界の特性を捉えることができた。また、ブルデューにおいては自明視されていた「正統文化」が、日本の文脈では多元的に捉え直す必要があることを確認できた。ウェブ調査であってもブルデューの界理論を応用した経験的研究は十分に可能であるが、サンプルの偏りなど、今後の研究に向けての課題を明確化する必要がある。